SYNTHESIS 2019

シンセシス

The Annual Report of the MGU Institute for Liberal Arts

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報 2019

INDEX

01 研究所概要 …… 01

02 月例研究報告 …… 07

03 ランゲージラウンジ活動報告 …… 27

04 研究プロジェクト …… 33

05 公開講演会 …… 41

06 研究業績 …… 45

01

研究所概要

01

2019年度教養教育センター付属研究所概要

Ⅰ．組織

◆研究所運営委員会執行部

所長：渡辺祐子
主任：石井友子　杉崎範英
研究部門運営委員：高桑光徳　福山勝也

◆研究所所員

石井友子　猪瀬浩平　塩谷祐人　植木献　上野寛子　大森洋子　亀ヶ谷純一　金珍娥　黒川貞生　洪潔清　篠崎美生子　嶋田彩司　杉崎範英　鈴木陽子　徐正敏　高木久夫　高桑光徳　田中祐介　張宏波　鄭栄桓　徳間晴美　中野綾子　永野茂洋　名須川学　西香織　野副朋子　長谷部美佳　福山勝也　三角明子　森田恭光　吉岡拓　渡辺祐子　Elam Jesse　MacLellan Dawn　Thomas Dax　吉田真　諏訪間恵美　坂本慶子　榎本翔太　安部淳

◆研究員

可部州彦　松山健作　黒田正明　池上康夫　石渡周二　鈴木義久　原田勝広　武光誠

Ⅱ．研究活動

1．研究プロジェクト（*＝代表者）

◆到達目標を明示したスペイン語教育の実践に向けて
*大森洋子、三角明子、落合佐枝、小倉麻由子、Leidy COTRINA

◆身体運動が運動機能および認知機能に及ぼす影響
*黒川貞生、杉崎範英、諏訪間恵美、坂本慶子、榎本翔太、小野寺正道

◆首都圏開発と市民活動の現代史的探究
*猪瀬浩平、長谷部美佳、植木献、可部州彦、荻村哲朗

2. 研究報告会

日付	報告者	テーマ
第1回（5/8）	吉岡 拓	近世社会の解体を考える
第2回（6/12）	塩谷 祐人	「フランス」文学とは、どこの文学なのか？
第3回（10/9）	嶋田 彩司	松山高吉のこと
第4回（11/13）	徳間 晴美	日本語学習者の敬語学習への向き合い方と敬語教育のあり方
第5回（12/11）	Dawn Grimes-MacLellan	Employment on the Periphery of Japanese Higher Education: A Study of Foreign Adjunct Faculty
第6回（1/8）	中野 綾子	兵士たちは何を読んだか －読書の歴史を問う研究の可能性

III. 教育活動

《学内語学試験》

	校舎	日付	受験者数
TOEIC IP試験			
〈第1回〉	横浜	6／26（水）	105名
	白金	6／22（土）	111名
〈第2回〉	横浜	10／23（水）	93名
	白金	10／19（土）	114名
〈第3回〉	横浜	12／18（水）	93名
	白金	12／14（土）	101名
TOEFL ITP試験			
〈第1回〉	横浜	6／5（水）	97名
〈第2回〉	横浜	10／2（水）	124名

《講座》

◆短期講座・通年講座◆

	DELE試験準備講座				ドイツ語技能検定試験対策講座（3級・4級）				TOPIK韓国語能力試験対策講座（TOPIK Ⅰ・TOPIK Ⅱ）			
学期	春学期	秋学期	夏季集中	春季集中	春学期	秋学期（閉講）	春学期（閉講）	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期
実施期間	5/8～6/26	10/2～11/27	9/9～9/13	3/9～3/13	5/7～6/25	10/1～11/26	5/8～6/26	10/2～11/27	5/15～6/28	10/2～11/27	5/10～6/28	10/4～11/29
校舎	白金	横浜	白金		白金		横浜		白金		横浜	
教室	1361	135	1351,1451	1305	1361	1353	545	136	1457	1353	135	135
曜時限	水曜5限	水曜4限	文法 10：00～13：00 実践 14：00～17：00		火曜5限		水曜4限		水曜4限		金曜4限	
回数	各：全8回		各10コマ（2コマ×5日）		各：全8回				各：全8回			
講師	Luis Rabasco		文法 仲道 慎治 実践 Eugenio del Prado		小山田 豊		佐藤 修司		李善姫（イ・ソニ）		金南听（キム・ナムン）	
募集人数	25名程度		各25名程度		10名程度		20名程度		20名程度			
エントリ者数	春：6名 秋：9名		文法 6名 実践 4名	文法 4名 実践 6名	春：5名 秋：2名		春：3名 秋：4名		春：7名 秋：6名		春：7名 秋：7名	
2019年度毎月出席者数（名）	5月（5・3・3・1） 6月（3・1・2・3）		文法（ー・5・3・2・2）	※文法クラス、実践クラスとも新型コロナウイルス感染症の影響拡大に伴い、講座中止	5月（4・3・2・2） 6月（3・2・3・3）		春学期閉講		5月（6・5・5） 6月（5・4・5・4） 7月（4）		5月（2・2・3・2） 6月（2・2・2・2）	
	10月（7・4・4・2） 11月（4・2・1・2）		実践（ー・2・2・1・2） ※文法クラス、実践クラスとも開講初日は台風により休講		秋学期閉講		10月（3・4・4・4） 11月（4・4・4・3）		10月（5・3・3・3） 11月（2・2・1・1）		10月（5・3・3・3） 11月（1・3・3・5）	

2019年度教養教育センター付属研究所概要

	中国語資格試験対策講座						実用フランス語技能検定試験対策講座		手話特別講座	キャンプインストラクター資格講座
	中検3級・HSK4級		中検4級・HSK3級		中検4級・HSK3級		仏検3級			
学期	春学期	秋学期(閉講)	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春季集中	秋学期
実施期間	5/7～6/25	10/1～11/26	5/7～6/25	10/1～11/26	5/8～7/3	10/2～11/27	5/7～6/11	9/26～11/14	3/9～3/13	11/27
校舎	白金			横浜			白金	横浜	白金	横浜
教室	1353	1355	1361	1355	135	135	1453	612	1407	体育館
曜時限	火曜1限		火曜2限		水曜3限		火曜5限	木曜5限		
回数	各：全8回						全6回	全7回	全10回	全1回
講師	鈴木 健太郎				黄宇暁(コウ・ウギョウ)		檜垣嗣子		荒木 泉(ゲスト講師)長田 静乃	塚脇 誠
募集人数	各8名程度						20名程度			
エントリ者数	春：6名 秋：3名		春：7名 秋：6名		春：8名 秋：6名		春：10名 秋：10名		20名	1名
2019年度毎月出席者数(名)	5月(4・4・4・4) 6月(4・5・5・3)		5月(5・4・5・4) 6月(4・3・4・4)		5月(5・5・3) 6月(3・4・1・3) 7月(2)		5月(11・8・6・4) 6月(3・4)		※新型コロナウイルス感染症の影響拡大に伴い、講座中止	(1)
	秋学期閉講		10月(5・3・4・3) 11月(3・4・3・3)		10月(3・4・3・3) 11月(3・3・3・3)		9月(6) 10月(4・2・4・3) 11月(2・1)			

◆TOEIC講座◆

講座名	校舎	曜時限	期間（コマ数）	講師	エントリ数	受講者数
〈試験対策講座〉春学期	白金	土3・4限	5/18～6/15（全10コマ）	長谷川剛	37名	11～22名
〈試験対策講座〉秋学期	白金	土3・4限	11/9～12/7（全10コマ）	長谷川剛	35名	17～21名
〈夏季集中特訓講座〉基礎コース	横浜	2・3限	8/26～9/3（全14コマ）	中村道生	35名	12～18名
〈夏季集中特訓講座〉実践コース	白金	2・3限	9/2～9/6（全10コマ）	長谷川剛	38名	13～20名
〈春季集中特訓講座〉基礎コース	横浜	2・3限	2/26～3/5（全14コマ）	中村道生	16名	5～11名
〈春季集中特訓講座〉実践コース	白金	2・3限	2/17～2/21（全10コマ）	長谷川剛	40名	12～19名

Ⅳ．その他

《公開講演会》

日付	会場	内容	ゲスト	参加者数
5/21（火）	白金校舎2102教室	映画「教誨師」上映会 および監督とのトークセッション 16:45～ 上映会 18:40～ トークセッション 主催：キリスト新聞社 協力：教養教育センター付属研究所	佐向大 監督 北川善也 学院牧師 （トークセッション進行： キリスト新聞社 松谷信司 氏）	（上映会） 約120名 （トークセッション） 65名
2/8（土）	明福寺	ドキュメンタリー映画『ちづる』 上映会 ＆ トークイベント	赤﨑正和 監督 猪瀬浩平 教授 （明治学院大学 教養教育センター） 臼井隆志 氏 （株式会社ミミクリデザインディレクター） 本学学生 （Collableインターン）	60名

《刊行物》

・明治学院大学　教養教育センター付属研究所年報　『SYNTHESIS 2019』3月発行

02

月例研究報告

02

月例研究報告

近世社会の解体を考える

吉岡　拓

戦後の明治維新史研究は、明治維新を封建制から絶対主義へ移行する画期と捉えるマルクス主義講座派的理解を前提に、その変革を担った主体の動向を解き明かす作業に注力していた。しかし、1970年代に入ると、研究の主流は政治史（政局史）へと移る。その結果、明治維新史研究は、次第に社会構造の変化という点への関心を喪失していった。本報告では、かかる研究潮流に対するささやかな抵抗として、近年研究の進展著しい近世身分制研究の知見に学びながら、京都近郊の村落地域（丹波国桑田郡山国郷）を事例に、近世社会が解体していく様の一端を描き出すことを試みた。

山国郷では、17世紀中より、大堰川から獲れる鮎を朝廷へ献上していた。名主（みょうしゅ）と呼ばれるこの地域の有力百姓達は、献上の独占（その表裏としての鮎の漁業権の独占）を企図したものの、18世紀中頃までは、その目的を果たせなかった。

変化が生じたのは、寛政年間である。この時期に起こった鮎献上をめぐる名主と平百姓の争論の結果、鮎献上は「名主」身分固有の特権として、京都代官所から公認された。ただし、京都代官所から「名主」身分として認められたのは、山国郷の中で禁裏御料だった村々に居住していた有力百姓だけであった。これにより、名主集団は、京都代官所から公認された「名主」身分の集団と、本来名主でありながら京都代官所からは身分的公認を得られなかった、禁裏御料以外の村々に居住する名主集団とに分化する。前者には、名主の居住していない村の住民で、その村が禁裏御料であったがゆえに、便宜上歎願書に名前を連ねた者も含まれていた。

19世紀に入ると、大堰川上流域に位置する山国郷で鮎を獲るのは困難になる。その結果、鮎献上に付随する商業的なメリットは失われ、献上は「名主」という身分を維持するためだけの行為へと変容する。「名主」身分の者達は、下流域の村から鮎を購入するなどして、天皇への鮎献上の継続を図った。それだけ、彼らにとって「名主」身分であることは重要な意味を持つものだったのである。

しかし、天皇・朝廷の側からすれば、献上者が誰であろうと、一定量の鮎さえ確保できれば良い。そのため、「名主」身分の者達から献上される鮎の量が減少してくると、天皇・朝廷は、「名主」身分ではない平百姓にも、鮎献上を要求するようになる。これは、当該地域からの朝廷への鮎献上を「名主」身分固有の特権として位置づけた京都代官所の方針からはあきらかに逸脱する行為であったが、朝廷側にそのことを気にしている様子はない。献上を要求された平百姓達もまた、「名主」身分への対抗意識から、要求に積極的に応じた。鮎を求める天皇・朝廷の動きは、多様な集団が天皇・朝廷に接近する機会をもたらし、そしてそのことが、結果として「名主」身分の者達の地域内での特権的な地位を脅かすこととなったのである。

幕末の文久期に入ると、幕府による天皇陵墓の修復保存事業が開始する。陵墓の現地管理者として守戸（しゅこ）が設置され、山国郷内に所在した光厳・後花園・後土御門天皇の陵墓にも、慶応3年（1867）5月までに計12名の郷内住民が守戸に就任した。問題は、この守戸が士分であることと、

守戸に就任した者のうちの7名が平百姓であったことである。幕末の政治社会状況が、名主・「名主」身分を超える存在を山国郷内に出現させたのであった。

「名主」身分の者、そして禁裏御料の住民ではなかったがゆえに寛政期の争論で「名主」身分とはなれなかった名主達は、この守戸に対抗するため、郷の鎮守である山国神社の社司（士分）になることを目指す。さらに、慶応4年（1868）1月3日、鳥羽伏見の戦いが始まり、5日夕方に山陰道鎮撫隊（総督：西園寺公望）が丹波方面へ出陣してくると、名主達は「禁庭江随身」（皇学館大学所蔵山国隊関係史料）を目論んだ。かかる彼らの目論見は、最終的には郷内住民で農兵隊を結成し、戊辰戦争に官軍側として参戦する、という形で実現する。農兵隊には名主のほか、平百姓も参加した。名主達が、出征からの帰郷後に名主へ取り立てることを提案し、平百姓達を勧誘した結果であった。

以上に見てきたことを、一般化しつつまとめよう。

近世社会とは、社会集団（共同組織）の重層と複合によって構成される（塚田孝『近世日本身分制の研究』兵庫部落問題研究所、1987年、356頁）。そして、身分とは、個人ではなく、この集団に対して支配権力により付与されていく（より正確に言うと、集団の特権要求に権力側が応じる）のであるが、重要なのは、集団は決して固定的なものではなく、近世社会の展開の中で絶えず分化・拡大していく、ということである。本報告の事例でいえば、名主という集団が、寛政期の争論の結果、「名主」身分の集団とそうではない集団に分化したことなどが、その典型である。

集団の分化・拡大は、多くの場合、新たな特権＝身分を獲得しようという活動の結果として生じる。身分の否定ではなく、新たな身分を獲得しようとした活動である以上、集団の分化・拡大それ自体は、近世身分制社会の論理に極めて適合的なものである。しかし、にもかかわらず、集団の分化・拡大は、結果として、近世地域社会の内部に存在していた身分秩序を、動揺・解体させる。名主の山国郷内での地位を維持するための活動の帰結である農兵隊の結成が、平百姓をその内部に迎え入れたことにより、かえって名主と平百姓の別を曖昧にしてしまったのは、そのことの象徴といえよう。

地域社会における近世の解体は、政治社会内の動向に一定程度規定されつつ、「身分上昇」という身分制社会に特有の願望の追求を各集団が行った結果として、自律的にもたらされるのである。

月例研究報告

「フランス」文学とは、どこの文学なのか?

塩谷　祐人

「フランス文学とはどこの国の文学なのか」という問いは、ソヴィエトに生まれ、フランスに移り住み、現在フランス語で執筆しているだけでなく、アカデミー・フランセーズの会員も務めるアンドレイ・マキーヌの例などを考えてみると、そう単純に答えが出るものではないとわかる。

ここでキーワードとなるのは「国民文学」と「世界文学」である。とりわけ19世紀の国民国家の成立と国民文学の誕生は、国と文学の結びつきを生み、それはまた同時に、「世界文学」というゲーテが提唱した概念を強調するようにも働いた。各国民文学同士の間に相対的な関係が生まれたとき、それぞれの国民文学が国家装置として機能し、それぞれの国が文学資本を所有し、複数形の「文学」による地理学ができあがったのである。こうして文学資本を国有化していく力学によって、フランス文学は外国出身の作家でさえもフランス文学を形成する作家として結びつけ、外国からやってきた作家の作品も自らの文学資本の一部としてきた。それゆえマキーヌのような国境を越えた作家は、逆説的にも国という括りと無関係であるどころか、常に所属の問題との関わり合いを余儀なくされる。だがここでは、その所属がどこにあるのかを問うことが重要なのではない。「その所属が常に問題になる」こと自体に意味がある。なぜならそれは、文学と国という現実的な結びつきを避けることが、いかに困難であるかを我々に突きつけるからである。

マキーヌは、処女作『ソヴィエト連邦の英雄の娘』を発表したときは、フランスの作家とみなされていない。外国人がフランス語で書いた作品は出版される可能性が低いと考えたマキーヌが、架空の訳者を作り出して出版社に売り込んだからである。彼が本格的にフランスの作家とみなされるようになったのは、『フランスの遺言書』がフランスの大きな文学賞を受けてからである。これを境に、マキーヌは急速にフランス文学のシステムに組み込まれていく。その延長線上にアカデミー・フランセーズ会員への選出も位置付けることができるだろう。それは、成功を収めた優れた作家を、フランスの文化を体現するものとして内部に取り込むことにほかならないからである。

ここで状況が複雑になるのは、マキーヌは「フランスの作家ではない」とも言われるからである。『フランスの遺言書』以来、マキーヌはフランス文学のシステムに組み込まれていった一方で、そこには幾分かの保留が常になされ、「フランス語で書くロシアの作家」と紹介されることも稀ではなかった。実際、彼のフランス語が現代のフランス人の書くフランス語とは違うという指摘は、彼の文体を語る際の常套句となっている。また小説の内容に関しても同様である。マキーヌの作品の多くは彼の祖国が舞台になっており、フランスとソヴィエトの二つの社会の狭間にいる人物たちの人間的な生き方や切ない愛が主題として扱われ、それらは確かにフランスの読者のエグゾティスムを刺激するものになっている。こうしてフランス文学でありながら、フランスの文学ではないというパラドクサルな立場が生まれるのである。

このパラドクサルな状況を生み出すことこそ、越境した作家の特徴であり、「フランス」文学とはどこの国の文学かという矛盾した問いを生み出しうる新たな力である。

国民国家および国民文学という概念が発達した19世紀以降、国家、国語そして文学を含めた文

化は、強い結びつきをみせてきた。そうした中でフランスは、外国出身の作家たちもフランスのものとして計上してきた。これをフランスのナショナリズムや中央集権的な性質と批判することは容易だろうが、必ずしも問題はそこにあるわけではない。とりわけ絶対王政以降蓄積されてきた豊かなフランスの文化資産、そしてそれを支えてきたフランス語という極めて強い力をもっていた言語が、外国人たちを引きつけてきたことは事実であり、フランスが作品を評価し、普遍的なものであると承認する役割を果たしてきたこともまた事実だからである。フランスは国有化と普遍的化の相反する機能を、文化の名において果たしてきた。そしてそれはまさに、越境した作家たち自身が強めてきた神話でもある。ここに越境した作家と所属を要求する国との相互補完的な関係が見て取れる。フランスに越境した作家たちは、フランスの作家としてその作品の普遍的な価値を認められ、またメジャー言語のフランス語を通すことで、世界文学の領野に入ることが可能になる。一方で、フランス文学は彼らを内部に取り込むことで、より多様な文化資産を国有化し、手に入れることができているのである。

こうした見方が例外的でないのは、マキーヌをはじめ、外国出身の作家たちがフランスの作家として扱われながらも、外国人である特異な面が強調されるという状況が証明している。フランスの作家となり、アカデミーという極めて国家的な機関に属し、いまやフランス文学の棚に置かれる一方で、ロシアの文脈でも語られるマキーヌは、こうしたフランスの一面を照らし出しているのである。

このような国家的な文学システムの一部として作家を捉えるやり方は、文学の普遍性や自律をないがしろにするアプローチであるようにみえるかもしれない。そのため、作家を国家的なシステムの一部としてのみ扱うような見方はすべきではないと、誤解のないように付け加えておきたい。注目すべきは、フランスの文学の同化作用と作家の思惑や理想のせめぎ合いなのである。なぜならそのせめぎ合いこそが、フランス文学という枠組みを内側から広げ、フランス文学と世界文学という２つの領野を、互いに打ち消しあうことなく接続できる可能性を我々に示しているからである。

「フランス文学とはどこの国の文学か」。それはフランスという国の文学であると同時に、あらゆる国の文学にもなりうる文学である。そしてあらゆる国の文学を内包できるのはフランスであるという自負が、フランスの文学システムには現れている。それが今後のフランス文学をどう決定していくのか、注目していきたい点である。そしてこれはフランスに顕著に表れているとはいえ、現在ではどこの国の文学にも無関係な出来事ではない。イギリス文学とは、ドイツ文学とは、スペイン文学とは、中国文学とは、韓国文学とは、そして日本文学とは、一体、どこの国の文学なのか。フランスの例は、こうした質問を我々に投げかけている。

月例研究報告

松山高吉のこと

嶋田　彩司

1874（明治7）年、キリスト教禁令が撤回された翌年のこと、ひとりの青年がキリスト教に入信した。彼の名は松山高吉（たかよし）、二十歳代の後半であった。明治期日本のキリスト教徒第一世代ともいうべき彼はその後、聖書の日本語訳や賛美歌集の編纂などで活躍し、同志社大学などを舞台に当代の高等教育にも貢献する。

さて、そのように明治初〜中期のキリスト教伸展の先導役を果たした彼は、じつは入信の直前まで熱心な国学徒（復古神道の信奉者）であった。ゆえに松山の入信は、事象として見る限り、皇国思想にこりかたまったナショナリストが突如として神の愛を説く普遍的宗教の信仰へと転じたかのごとくであるが、その“転回”にどのような背景があったのか、発表者の関心はその一点にある。

①　松山のキリスト教入信（「故グリーン博士を追懐す」[1]）

〔原文〕（グリーンの神戸の居宅を：稿者補）訪ひしは明治五年の二月十九日なりき〈略〉之れに親交を求めしは異教の国家を害毒せんことを憂ひて其教義を知り其内情を探らんが為なりき　然るに交を重ね親を増すに随ひて博士の清き品性正しき言行は余をして心機一転せしむるに至れり

〔訳文〕グリーンの神戸の居宅を尋ねたのは、明治5年の2月19日であった。〈略〉グリーン博士に親交を求めていったのは、キリスト教という異教が国家に害をなすことを憂いてのことで、教義を知り、内状を探ることが目的であった。ところが、グリーン博士との交わりを重ね、親しくなるにつれて、グリーン博士の人柄の清潔さと言行の正しさが、私をしてキリスト教の信仰へと向かわせたのだ。

②　松山高吉と国学

松山高吉は1847年に、越後の糸魚川に生まれた。松山家は代々の名家であり、一族には文芸をよくする者が多かった。高吉もまた、幼少の頃より漢学や和歌を学び、国学（平田篤胤門）の本格的な勉学もおさめた。青年時代の日録『旅日記』[2]には、1869（明治2）年のこととして、次の記述がある。

〔原文〕七月中旬ヨリ白川家学館ニ転寓ス　国事ニ奔走ノ余暇神山四郎ノ塾ニ通テ漢学ヲ修ム十月廿六日白川千代麿君ト共ニ西京ヲ発シ〈略〉東京ニ着シ神田橋通白川神祇大副殿ノ邸ニ寄寓ス

〔訳文〕7月中旬より京都の白川家学館に寄寓先を変えた。「国事に奔走」するかたわら、神山四郎の塾で漢学を修めた。10月26日、白川千代麿と共に京都を発って〈略〉東京に着き神田橋通りの神祇大副宅に寄寓することとなった。

白川家は花山天皇の流れを汲み、代々神祇官をつとめる家柄。皇室祭祀を司る伯家神道の家元で、

平田篤胤・銕胤との関わりも深い。その学舎に住んで、松山は「国事に奔走」したという。その後のくだりに名前のみえる白川千代麿は、この年の7月に神祇大副（長官に次ぐ次官。神祇官は同年に創設された、国家祭祀を管理する機関名）に就任した白川資訓の実弟で、赤報隊に関する史料にも名前がみえる。その人物と行動を共にしていたということは、若き日の松山にも政治的活動の経験があったものと考えてよい。また、上記①の諜報活動も白川家および神祇官との関わりで推測することが可能である（市川栄之助事件）。

③　国学とはなにか（その1：本居宣長）

国学とは“失われた神道”の復活をめざす学問的な営為であるということができる。江戸時代中期、思想界の新潮流のひとつとして、日本古来の正統な神道の復活を提唱する動きがあらわれた。これを復古神道という。そして、復古神道の理論構築のための学問研究を国学という。国学者たちは、古代の日本に儒教や仏教が伝来し、日本人はその思想に毒されてしまい、本来もっていた精神を失ってしまったと考える。そして、失われたその古き良き日本的な精神（神道）を今こそ取り戻すべきだ（復古）と主張する。

言い換えればそれは、儒教や仏教による精神支配からの脱却でもある。国学者たちの神道観によれば、仏教や儒教の伝来から江戸時代になるまでの長い間、神道は主として仏教の支配下におかれてきた（本地垂迹）。また江戸時代になってからは、神道は儒教と結びつく（儒家神道）。国学者が企てたのはそのような儒教や仏教による支配からの脱却と自立であった。そしてこのとき、回復すべき日本の精神の象徴として担ぎ出されたのが、『古事記』等の日本神話において世界の統括者として描かれる天照大御神（アマテラス）であり、その子孫としての天皇である。

国学を学問的に大成したと評される本居宣長（1730〜1801）は、その主要著書『直毘霊』（1790年）において次のように述べる。ここには日本こそが世界の盟主たるべき国であるという選民意識があらわである。

〔原文〕皇大御国は、掛けまくも可畏き神御祖天照大御神の御生れ坐せる大御国にして、万づの国に勝れたる所由は、先づここに著し。国といふ国に、此の大御神の大御徳み被らぬ国なし。

〔訳文〕我が日本は、神のなかの神である天照大御神がお生まれになった国であり、日本が他のどの国よりも優れている根拠は、天照大御神が日本に生まれていることそれ自体によって明らかである。世界中の他の国はすべてこの天照大御神の恩恵に浴しているのだ。

④　日の神論争

宣長の思想を痛烈に批判した人物に上田秋成（1734〜1809）がいる。宣長との間で交わされた論争（『呵刈葭』所収）の争点は多岐にわたるが、そのひとつにアマテラス神話の優越性を巡る

やりとりがある。

上田秋成

〔原文〕日神の御事、四海万国を照しますとはいかが。〈略〉ここに阿乱它国の〈略〉地球之図といふ物を閲るに〈略〉吾皇国は〈略〉ただひろき池の面にささやかなる一葉を散しかけたる如き小嶋なりけり。然るを異国の人に対して、此小嶋こそ万邦に先立て開闢たれ、大世界を臨照ましますの日月は、ここに現しましし本国也。因て万邦悉く吾国の恩光を被らぬはなし〈略〉と教ふ共、一国も其言に服せぬのみならず、其如き伝説は吾国にも有て、あの日月は吾国の太古に現はれましししにこそあれと云争んを、誰か截断して事は果すべき。

〔訳文〕日の神のこと、世界中を照らしているとはどういうことか。〈略〉オランダの地球図という物を見れば、日本は大きな池に浮かんだ小さな葉っぱのようなものだ。それなのに、外国人に対して、この小さな島こそもっともはやく開かれたのであり、世界を照らしている太陽や月は、この日本から生まれたのだ。だから世界中の国々が我が国の恩恵を受けている〈略〉のだと言っても、誰もそんなことには納得しないどころか、そんな伝説は私の国にもあって、太陽や月は遠い昔、我が国に生まれたのだと主張して言い争いになったとき、果たして誰にどちらが正しいといえるのか。

本居宣長

〔原文〕万国の図を見たることをめづらしげにことごとしくいへるもをかし。かの図、今時誰か見ざる者あらん。又皇国のいとしも廣大ならぬこともたれかしらざらん。凡て物の尊卑美悪は形の大小のみによる物にあらず。〈略〉抑皇国は四海万国の元本宗主たる国にして、幅員のさしも廣大ならざることは〈略〉必さて宜しかるべき深理のあることなるべし。〈略〉信ぜん人は信ぜよ。信ぜざらん人の信ぜざるは又何事かあらん。〈略〉正しき古典に載て伝はり来たる古説を、皇国の人としてかくいひおとすべきことかは。

〔訳文〕地球の地図を見たことを珍しげに騒ぎ立てるとは愚かではないか。そんな地図を今時見たことがない人間なんていない。また日本の国土がさして大きくないことも皆知っている。ものの価値は大きさだけで決まるものでもないだろう。〈略〉そもそも我が国は世界の盟主たるべき国であって、国土がたいして大きくないことにも〈略〉かならずや深い真理が隠されているのだ。〈略〉信じたい者が信じれば良い。信じないという人にはどうしようもないではないか。〈略〉由緒ある古典（『古事記』）に記載されていることなのに、そのように難癖をつけるとは、それでも神の国日本の人間か。

秋成は今日では『雨月物語』の作者として知られるが、宣長の師たる賀茂真淵の系列につながる

国学者であった。しかしながら、同じ国学者といっても、日本の古文献の解読に没頭してきた宣長と違って、秋成は中国通俗文学を白話のまま読み書きし、朝鮮通信使と面談した経験もある。今日的な表現を用いるなら、秋成はある意味でリベラルな"国際感覚"を発揮し、宣長の神国日本の絶対化を批判（相対化）して、『古事記』のような古文献は世界の国々のどこにでもあり、それらは等価値であるはずだという。このとき宣長が秋成を論破するためには、世界の国々にそれぞれにある太陽神話のなかでも、日本のアマテラス神話が唯一真性のものであることの説得力ある説明が必要であった。しかし宣長の応答は、「信ぜん人は信ぜよ。信ぜざらん人の信ぜざるは又何事かあらん（信じたい者が信じれば良い。信じないという人にはどうしようもないではないか）」といい、「皇国の人としてかくいひおとすべきことかは（日本人が日本のことを貶めて何になる。それでも日本国民か）」というものであった。もちろん、秋成は日本を貶めようとはしていない。秋成は同じ国学者として、日本に『古事記』があり、そこに記載されたアマテラス伝説を自分は信奉するが、おなじく別の国の人間が自国の歴史書に記載された太陽神話を信じ、自国を世界の盟主と主張することも容認するというに過ぎない。

宣長は秋成の問いかけをずらして、神国日本の優越性について信／不信という次元の議論にすり替えてしまうのである。

⑤　国学とはなにか（その2：平田篤胤）

平田篤胤は宣長の後継者を自認する。篤胤の国学の最大のテーマは、儒仏以前の古代日本に天皇を中心とする神道国家が確かに存在したこと、そして神国日本が世界の盟主たり得る優越性をもっていることを証明することであった。そして、そのために篤胤がとった方法は、和漢の諸学問はもとよりキリスト教までをも渉猟し、そこから有用なものを自己に都合良く利用（批判的にいうならば"捏造"）するというものであった。

篤胤のキリスト教研究ノートともいうべき著作に『本教外篇』（1806年）[3]がある。この書の存在については篤胤自身が同書巻頭に「未だ他見を許さず」と書いたことから、ながく秘匿されたままであった。

〔原文〕義の為にして窘難を被る者は、これ即ち真福にて、その已に天国を得て処死せざると為るなり、これ、神道の奥妙

〔訳文〕義の為に苦難に遭った者は、すなわち真に幸福であって、その者はすでに天国を手に入れて、不死の身となる。これこそ神道の奥義である。

cf. 義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである（山上の垂訓）

〔原文〕人の霊魂は原より一身の主なり。形骸百体は霊魂の従役なる者なり。〈略〉形骸は土に帰し、主は自存して滅亡せず、必ず幽世に入りて、幽神のその賞罰を審判することを聴き〈略〉

善人は〈略〉永々此の国土の幽世に侍はしめて〈略〉天上に往来しつつ〈略〉悪人は〈略〉遂に予美都国に逐はれて〈略〉懊悩痛哭して永々身に脱せざらむ。

〔訳文〕人の霊魂は一身において主であり、肉体は霊魂の従者である。〈略〉人が死ぬと肉体は土に帰るが、主たる霊魂は存続して、かならず幽世（死者の世界）に入り、幽神（死者の世界を司る神）によって生前の行ないについての審判を聞くこととなる〈略〉善者は永久にこの国土とともにある幽世にいながら天上世界を往来し〈略〉悪人は「よもつ国」（「黄泉国」に同じ）に追いやられて、永久にそこで苦しむことになる

〔原文〕外国々に上帝、天帝、梵天王、閻魔王などいひて、種々の事実あるは、大国主大神の分霊。

〔訳文〕諸外国に上帝、天帝、梵天王、閻魔王などといって、審判をおこなう者がいろいろいるのは、すべて我が国の大国主大神の分身である。

篤胤は大国主大神（最後の審判者）が世界各地に伝播して、上帝や天帝、梵天、閻魔大王になったという。それらは、もとは日本古代の神道のなかにあったものであり、すべて日本で生まれ、それが世界中に伝播した、というのが平田神学の基本構想である。宣長は世界中の神話で日本のものがもっとも真正であるといったが、篤胤にいたってはそもそもすべての起源は日本にあるという。篤胤の代表作『霊の真柱』（1813年）には次のような記述がある。

〔原文〕遥か西の極なる国々の古き伝に、世の初発、天神既に天地を造り了りて後に、土塊を二つ丸めて、これを男女の神と化し、その男神の名を安太牟といひ、女神の名を延波といへるが、此二人の神して、国土を生めりといふ説の存るは、全く、皇国の古伝の訛と聞えたり。

〔訳文〕遥か西方にある国々の古伝に、世界のはじまりの時、主宰神が天地を造り終わったあとで、土まんじゅうを二つ作って、これを男女の神とし、男神を安太牟、女神を延波と名付けたが、この二神が国土を生んだというのは、まったく我が国の古神話（注：イザナキとイザナミ）が誤って伝えられたものである。

国学は儒仏以前の神道を信奉するがゆえに、外来思想・宗教を拒絶し、排撃するような態度をとりつづけた。しかし、それは宣長までの国学の正統であって、篤胤においては一気に反転し、内外の思想も宗教も総動員されて国粋の神道の“創作”に寄与することとなる。そして、その最たるものが創造主天之御中主である（『本教外篇』）[4]。

〔原文〕天地万物に大元高祖神あり。御名を天之御中主と申す。始めもなくまた終わりもなく、天上に坐します。天地万物を生ずべき徳を蘊し、為す事なく寂然として（謂ゆる元始の時より高天原に大御坐す）。万有を主宰し玉ふ。

〔訳文〕天地万物にその大元となる尊い神がいらっしゃる。天之御中主という。始めも終わりもなく天上世界にいらっしゃる。世界のあらゆるものを生みだす徳を積み、何も行為せぬ

ま存在されている（いわゆる天地開闢の時から天上世界にいらっしゃる神である）。万物の主宰神である。

宣長は『古事記』を唯一の聖典としたが、その『古事記』には天地開闢の記述はない。一方で、『日本書紀』には「天地開闢の時、世界の渾沌は鶏卵のようであった」という記述がある。これは中国の『淮南子』に依拠した文辞であり、それゆえ宣長は『日本書紀』に依拠することをしなかった。宣長にとって外国の文典に拠って神道を説くなどということは外道である。

しかし、平田篤胤はちがう。篤胤にとってすべての古文典の記述は日本の古神道に起源をもつものであった。だから『淮南子』に出典があってもなんら差し支えはない。なぜなら、それも日本から伝わったものだからである。篤胤は『古史成文』（1811年）にも、「古天地未生之時。於天御虚空生坐神之御名。天之御中主神（はるか古代に天地がまだ生成していない時に、虚空にいらっしゃった神のお名前は天御中主）」と書いている。

神道は一般に多神教に属すると理解されている。その限りでは、神道とキリスト教の懸隔は大きい。内村鑑三も次のように書いている（『余は如何にして基督教徒となりし乎』）。

新しい信仰の実際的利益はただちに余に明白となった。〈略〉宇宙には一つの神があるだけである。以前に信じていたように多数―八百万以上―でないことを余は教えられた。基督教的唯一神教は余のすべての迷信の根に斧をおろした。

しかし、「多神教としての神道」と「一神教としてのキリスト教」の中間に、平田篤胤の言説をおいてみるとき、両者の懸隔はかなり縮まる。篤胤は、日本神話の初発の神が宇宙を支配し、それゆえ皇国が世界の盟主たり得るという“創作”をおこなう。これは宣長の国学では禁じ手であった。篤胤は宣長の後継者を自認したが、その神道観は宣長のそれを大幅に上書きしたものであった。

⑥　松山高吉の国学とキリスト教

松山の平田国学への親炙は深い。松山が神道について記した書『神道起原』（1893年）の次の記述をみれば明らかである。

〔原文〕上古の日本国民は天地の主宰なる造化の神を信奉せり〈略〉天御中主とは天に在して宇宙を主宰し給う

〔訳文〕古代の日本人は天地の主宰者である造化神を信奉していた。〈略〉その造化神とは天御中主であって、天にいて宇宙を支配しているのだ。

〔原文〕大国主の主治する幽界は暗く穢き黄泉国と全く別にして即ち肉体の人の住むこの世の国に対する霊の国なり〈略〉未来の賞罰も固より大国主神の掌るところとす。

〔訳文〕大国主神が治めるあの世は、暗くきたない黄泉国とはまったく別のものであり、我々

が暮らすこの世の裏側にある霊魂の国である〈略〉将来の審判もこの大国主神の司るところである。

とくに注目すべきは、神道にいう八百万の神に関するくだりであろう。

〔原文〕故に神（真の）なるもあり、人なるもあり、木石禽獣なるもあり〈略〉上古の史を繙けばその大半は神の字にて填められたれど上代の人はその区別をよく知れるが故に惑ふことはなかりき、崇拝する所の神は天地の主宰者なる造化の神にかぎれり

〔訳文〕それゆえ本物の神もいれば、人も、木石や禽獣までも神と呼ばれる〈略〉このように古代の史書を繙けば至るところ神ばかりなのであるが、当時の人はその区別をよくわきまえていたので紛れることはなかったのである。つまり古代において人々が崇拝した神は唯一天地の主宰者たる造化神だけであった。

松山は篤胤の所説をさらに一歩推し進めて、古代において神の名称はさまざまなものに冠されていても、真に人々の信仰の対象となる神は造物主すなわち天御中主のみであったという。ここまでくればもはや、多神教たる神道と一神教たるキリスト教は指呼の間にあるといってよい。そして松山は、“失われた神道”とキリスト教の類似性を説くことによって、日本にはキリスト教が似つかわしいと主張する。彼は、儒教や仏教、あるいはそれと習合した既成神道が日本人に「禍害」を及ぼしているとしたうえで、次のように書く。

〔原文〕日本は宗教の凶荒地とやいはまし、若しこの凶荒を救ふべき真宗教なくば日本数千万の精霊をいかにせん、幸に基督教ありてその触望を満たさんとす、日本固有の宗教は満面笑を含んで歓迎すべし。

〔訳文〕日本は宗教の「荒れ地」である。これを耕し肥沃にする真正の宗教がなければ、日本人数千万の魂は救われないであろう。しかし、幸いにもキリスト教がある。キリスト教こそは日本人の渇望を満たしてくれるであろう。そのとき日本固有の宗教はキリスト教を満面の笑みを浮かべて迎えてくれるにちがいない。

宣長や篤胤が復古の対象とした儒仏以前の真正の神道は、松山高吉においては「日本固有の宗教」と呼称される。そして、「日本固有の宗教」（≒古神道）の欠落にキリスト教をあてがうことにより、宗教不毛の地たる日本に救済がもたらされると主張する。

⑦　結びにかえて（『キリスト教研究所紀要』への投稿論文を一部改変して掲載）

誤解をおそれずにいえば、かつて国学者であった松山高吉は、キリスト教による「復古」を唱えているのだといってもよい。もちろん、クリスチャンとしての松山は「復古」という言葉を使わな

い。しかしそれでも、松山が目指すものは古代の日本人がもっていたはずの豊饒な宗教心の回復であり、それは実質としては“失われた神道”の時代への回帰すなわち「復古」にほかならない。
〔原文〕固有宗教を識認し相提携して働をなさば〈略〉神の光栄とともに国家の光栄もあがらん。
〔訳文〕「固有の宗教」をよく理解して、手を取り合うなら、神の栄光とともに国家の栄光もいや増すであろう。

ここにいう「国家の栄光」とはなにであろうか。松山は「固有の宗教」の本質について「基本は即ち敬神なり」と書いたうえで、次のように続ける。

〔原文〕皇統の連綿たるも〈略〉王位は即ち天神の定むる所にして臣民の犯すべき者にあらずとの信仰上代の国民にありて遺続せしに因る。

〔訳文〕万世一系の皇統というのも、王位は天の神の定めたものであって、臣民が口出しすべきものではないという神への崇信が古代の国民にあり、それが今に続いているからである。

松山高吉のなかでは、キリスト教の信仰と天皇への崇敬の念は衝突しない。もちろん彼の念願は「日本のキリスト教化」にある。しかしそのことと「キリスト教の日本化」は松山のなかで混然としており、「固有の宗教」とキリスト教を二重写しにすることによって、キリスト教信仰が同時に皇室崇拝につながってしまうことへの危機感はまったくない。というよりもむしろ彼のなかでは、皇室崇拝はきわめて当然のこととして、キリスト教信仰と矛盾なく併存しているようである。

それは松山に限らず、明治初期の時代にあっては自然なことでもあったのだろう。しかしながら、「キリスト教の日本化」が「神道的キリスト教」を生み出し、それがやがてアジア太平洋戦争における植民地支配の肯定につながったという事実は、海老名弾正（1859〜1937）や弟子の渡瀬常吉（1867〜1944）らの名前とともによく知られているところである。松山高吉は自身は平和的な思想の持ち主であったが、時代の状勢を俯瞰するとき、彼の信仰の立ち位置がきわめて危ういものであったこともまた否定できない。（中略）松山高吉がキリスト教の信仰をもつにあたって、かつて彼が学んだ国学はけっして否定的な媒介となっていない。むしろ反対に、松山は国学（復古神道）を学んだことによってより容易にキリスト教へ入ってゆけたのだとさえ発表者には思われる。

すでにみたように、若き日の松山高吉は平田篤胤一門の国学の学徒として、外敵であるキリスト教に近づいていった。そこでグリーンという尊敬すべき宣教師と出会えたことは、彼にとっておおきな僥倖であった。しかしそれに加えて、敵愾心をもって臨んだキリスト教の教えのなかに、彼が学んだ平田国学のそれと通じ合う内容があったことが、すくなくとも彼の敵意をやわらげる効果を発揮したこともまた確かであろうと思う。とくに篤胤による創造主天御中主の“創作”は、松山のキリスト教への接近に大きく資するところとなったであろう。（中略）

ともあれ、平田篤胤は抜群の“発明家”であり“戦略家”であった。彼の国学が明治の社会と文化に

及ぼした影響は大きい。本発表ではその一事例として松山高吉をとりあげたわけであるが、彼のキリスト教入信を、国粋主義からキリスト教への回心という単純な言い方で説明することはできない。幕末期に彼が親炙した平田国学のなかにすでにキリスト教は組み込まれていた。それゆえ松山もまた明治のクリスチャンとして、天皇崇拝の影を引きずらざるを得なかった。国学とキリスト教は、一見対立するもののようでありながら、実のところ平田篤胤によって予め密かにその接合が成し遂げられていたのである。

注

[1] グリーンの葬式を番町教会でおこなったときのスピーチ原稿。大正二年九月十五日の日付が記載されている。松山家所蔵の遺稿に含まれる。未翻刻。

[2] 溝口靖夫著『松山高吉』（1969年）所収。

[3] 村岡典嗣「平田篤胤の神学における耶蘇教の影響」（『日本思想史研究』）参照。

[4] 子安宣邦『平田篤胤の世界』（ぺりかん社）等に指摘がある。

月例研究報告

日本語学習者の敬語学習への向き合い方と敬語教育のあり方

徳間　晴美

「敬語は難しい」という声は、日本語学習者からよく聞かれる。具体的には、「敬語の形が多すぎて覚えるのが大変だ」（表現形式の複雑さ）、「頑張って敬語を使ったら、使い過ぎだと言われてしまう」（程度の難しさ）といった声のほか、「へりくだったりしたくない」「敬語を使うと距離ができて嫌だ」（母文化・母習慣に基づく抵抗感）、「です・ます体で話せれば十分だ」「日本人も間違えている」（習得の必要性に対する疑念）、「間違えた時に誤解されるのが怖い」（表現意図が誤って伝わることへの恐怖心）など、心理的な抵抗感さらにはアイデンティティに関わる事情があり、敬語学習に向き合う姿勢を安定的に維持するのは容易ではない。

日本語学習者にも多様な学び方があるため一概には言えないが、総合的な日本語教科書を使う場合には、初級の終わりから初中級の段階で、ある程度体系的に敬語を学ぶことになる。しかし、教科書の学習項目の一つとしてシラバスに組み込まれた場合、敬語体系や表現形式の学習に時間がとられ、運用能力が身につくところまではいかないことが多い。このような学び方をした場合、学習者の中に「敬語は難しい」という印象だけが残るのも不思議ではない。

文化庁が2007年に示した「敬語の指針」（文化審議会答申）に立ち返り、敬語の重要性を確認すると、そこには「相互尊重」を基盤とし、敬語使用はあくまでも「自己表現」であるべきだとされている。この考え方に基づく敬語の重要性は、近年ようやく日本語教育で扱われてきてはいるものの、依然として、敬語は「固定的・絶対的な使い方がなされるもの」、あるいは「上下・親疎関係を明示するためのもの」という学習者の誤解も根強いものがある。

日本語学習者の敬語学習への向き合い方を考えるには、学習者がどのような考えで、どのような思いを抱きながら敬語学習に臨むのか、学習者の内面に迫る必要がある。これまで、学習者の内面に着目した敬語教育の研究では、敬語の学習成果に情意面が影響していることを明らかにした量的研究（鄧2011、2012）や、敬語使用不安を捉える中で、学習者の敬語の使用や学習に対する向き合い方は常に不安定であり、ジレンマに陥る可能性と隣り合わせであることを指摘した質的研究（徳間2010）などが見られる。日本語学習者の立場に立って敬語学習を考えると、敬語の使い方が自分を人としてどう表現するかにつながるという重要性がありながらも、敬語の習得や継続的な学習は容易ではないと言える。

日本語でコミュニケーションをする以上、敬語に全く触れずにいることは難しい。よって、日本語学習者の一人ひとりが、日本語を学ぶにあたって敬語学習とどう向き合うかを考える必要がある。どう向き合うか、すなわち敬語学習への向き合い方を方向付けるのは、日本語でコミュニケーションする私はどのような私でありたいのかという、日本語学習者による自分自身への問いであると筆者は考える。そして、この問いに向き合って考えるためには、敬語教育の中で、「日本語学習者としてのありたい自分」に向き合う場を創ること、そして敬語が持つ表現力を初級の段階から誤解なく学ぶ機会を提供することが必要である。日本語学習者が日本語のコミュニケーションにおいても、主体的に自分のあり方を形成できることに気づかせ、自分らしいコミュニケーションができるよう

支援することが重要であろう。

引用文献

鄧暁梅（2011）「台湾人日本語学習者の敬語学習における情意的意識とその学習成果に関する一考察」『日本語教育研究』No.57,109-123.

鄧暁梅（2012）「日本語の敬語の学習効果と敬語に関する情意的要因の影響関係：台湾人日本語学習者を対象として」『南山言語科学』No.7, pp.33-45.

徳間晴美（2010）「中上級日本語学習者が抱く敬語使用不安の様相－学習者のことばに基づく質的分析による事例－」『言語文化と日本語教育』第40号,pp.41-50.

文化審議会（2007）「敬語の指針（答申）」文化庁
〈http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_6/pdf/keigo_tousin.pdf〉
（2019年9月2日閲覧）

Employment on the Periphery of Japanese Higher Education: A Study of Foreign Adjunct Faculty

Dawn Grimes-MacLellan

This report discusses preliminary survey research that investigated the personal, educational and professional identities of foreign adjunct faculty at Japanese universities. According to the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (2017), adjunct faculty make up roughly half of the teaching labor force in Japanese higher education. In foreign language instruction, reliance on part-time instructors can be considerably higher, often constituting the majority of the academic labor force in many programs. This majority position has not translated into superior workplace benefits, however, and the differentials in terms of pay, workload, and benefits are substantial. Moreover, adjunct faculty frequently have little or no voice in curricular, pedagogical or administrative matters that impact their classrooms, and more generally lack access to the status, stability, office space, and research opportunities accorded their full-time counterparts.

A large-scale survey instrument was developed to investigate the choices and challenges associated with contingent employment of foreign instructors at Japanese universities. Data was collected through an online survey platform about the personal attributes, motivations, and career patterns of foreign adjunct faculty along with their conceptualization of their role as adjunct faculty including decision-making processes in work selection, daily time and work-life management, attitudes toward research and publishing, and financial and retirement planning. Subsequently, five main areas were identified for analysis in the research: participant demographics, employment situation and goals, work-life balance, benefits, and challenges of part-time employment.

Data analysis is currently ongoing, but a significant finding revealed in the data is the major impact that the lack of job security has on teachers' personal and professional lives. Participants cited this particular challenge as the root cause for marriage trouble, inability to make future plans, stress and financial anguish. In addition, there was a growing sense among respondents that universities "want more for less," with additional requirements and restrictions over the years such as longer semesters, 100-minute classes, no salary increases, limited contracts, and greater requirements asked for in job advertisements. A more comprehensive report of all of the research findings will be forthcoming upon completion of data analysis addressing the choices and challenges associated with contingent employment of foreign adjunct faculty at Japanese universities.

月例研究報告

兵士たちは何を読んだか
—読書の歴史を問う研究の可能性

中野　綾子

近代日本における戦時下の文学や作家をとりまく通俗的なイメージに、言論統制によって厳しく抑圧されていたというものがある。たしかにそのイメージは正しくもあるが、そうした抑圧のみで戦時下の文学を考えることもできない。アジア太平洋戦争下において、日本文学が戦争と具体的にどのように関わりあっていたのかを考えることも必要であろう。なかでも著者は、兵士と読書の関係性に着目することで、戦時下の文学の問題について考えてきた。今回の研究報告会では、こうした研究のなかでも慰問雑誌文化について紹介をおこなった。

兵士と読書を結ぶ典型的イメージとして、学徒兵の次のような例がある。「学生兵にとって辛かったことの一つは、軍隊内で自由に読書ができないことであり、陸軍では書物をいっさい許されぬ場合が多く、海軍でもある種の本（武士道を説いた『葉隠』）のみ携行がゆるされるという状況」であったというものである（日本戦没学生記念会編「注釈」『新版きけわだつみのこえ』岩波書店、1995）。このような過酷な状況での許されざる読書を行う学徒兵のイメージが流通する一方で、そのほかの兵士がどのような読書を行っていたのかについてはほとんど語られてはこなかった。

たとえば、1937年の開戦と共に慰問図書を送る活動がおこなわれている。文学者で先陣を切ったのは、報道記者として従軍した木村毅である。木村は帰還後、すぐさまに「前線文庫」として戦地へ書物を送る活動を呼びかけ、それに反応した菊池寛ら文芸家協会によって、その試みは実現することとなった。それは、木村が指摘したように「前線の将士に読書の要求のある」ことを、出版業界、文学者、軍部へと知らしめることにもなった（木村毅「前線文庫を送れ」『東京日日新聞』夕刊、1937.8.20）。

こうして兵士が読者として認識されると、出版社をはじめとして慰問活動がおこなわれていく。なかでも大規模なものに、陸軍の要請による大日本雄弁会講談社の『陣中倶楽部』と海軍の要請による興亜日本社の『戦線文庫』がある。これらは日本国内にて編集印刷ののちに、軍を通して中国前線地域へと配布された。そのほか、岩波書店が陸軍の要請により岩波文庫を2度にわたり供出するなど、組織的に戦地へと書物が届けられていく（『岩波文庫総目録1927-1987』岩波書店、1987.7）。さらには、こうした兵士専用としての雑誌や書物だけではなく、一般誌や青年雑誌、少女雑誌、婦人雑誌などが、「慰問特集号」を組み、「前線へ送りましょう」と呼び掛けがなされていったのである。

そもそも、大正時代からすでに日本語書物の流通網は外地へと進出をし、朝鮮、満洲、台湾などで、新刊書店や古書店が営業をおこなっていた。戦時下においては、さらなる進出が目指され、1941年には「出版新体制」とも呼ばれる日本出版文化協会および日本出版配給株式会社の設立により、書物の一元配給が実現されていく。1943年には、日本語書物の流通のために南方へも出張所の設置が決定する。こうして、兵士は送られる書物だけではなく、進出した書店においても書物を手に入れる環境が整っていたのである。

なぜ兵士へ書物は届けられたのであろうか。まずは出版社側の商業的な要因がある。たとえば、

大日本雄弁会講談社は社内報にて、たびたび中国戦線にて『キング』や『講談倶楽部』が売れていることをアピールし、宣伝文句へと転用していく。また、文芸春秋社などでも、臨時増刊号として「慰問特集号」を刊行する。それは、「慰問特集号」制作に伴い、印刷用紙の増配がおこなわれたこと、また慰問品として売れ行きの増加が見込めたことが背景にある。つぎに、第一次世界大戦での戦勝国の事例を参考にしていたことも考えられる。大日本雄弁会講談社は、1938年に『精神弾薬の威力　欧州大戦と雑誌読物の調査』というパンフレットを作成し、そのなかで、先の大戦における兵士の読書を調査している。戦勝国ではどのような兵士の読書がおこなわれていたのかが、まとめられ、各出版社において共有されていたのである。さらには報道部においても、同様の見解が開示されることになる。

このように、兵士へ書物を送る慰問活動は、文学者や出版社、一般市民を巻き込みながら行われ、銃後から前線へと書物が届けられた。佐藤卓己は『キングの時代』（岩波書店、2002）のなかで、『キング』が「読書の一般化、普遍化」を後押しし、さらに戦時下における市民の「国民化」に貢献したことを指摘しているが、前線と銃後を繋ぐ慰問雑誌は、前線と銃後を象徴的に繋ぐメディアとして、異なる読者層を持つ様々な雑誌を「国民の読物化」することとなったのではないだろうか。それが、実際にどのように読まれたのかはまた今後のさらなる調査が必要となる。

03

ランゲージラウンジ
活動報告

03

2019年度ランゲージラウンジ活動報告

教養教育センター　ランゲージラウンジ運営委員会

1. 総括

2008年に始まったランゲージラウンジ活動は、まず語学検定試験用の問題等をそろえて学生たちが自律的に学習できる環境をつくることから始まった。現在では、英語とスペイン語はILSSP（Independent Language Study Support Program）を開設し、学習者自らが具体的な目標を設定して、そのゴールに向かって定期的にチューターと面談しながら（英語）、あるいはオンライン学習を用いて（スペイン語）、自律学習実践ができるように支援を行っている。また、それ以外にも、言語によっては曜日・時限を決めて、ネイティブスピーカーとの会話実践の場を提供したり、日頃の学習のサポートを行ったりしている。

以上のように、現在は、各外国語がそれぞれ独自の事情を考慮して行っている。引き続き次年度についても、留学生との交流の機会を増やし、言語がコミュニケーションの道具であることを実感できるような場を増やすことを目標に、多様な外国語支援活動を行っていきたい。

2. 活動詳細

2.1　英語部門：鈴木陽子

英語部門では、二種類の自律学習支援プログラムを実施した。一つは、一学期間にわたって自律学習を支援するIndependent Language Study Support Program (ILSSP)、もう一つは、一回20分のセッションから参加可能なEnglish Clinicである。

ILSSPは、本学非常勤講師の山森由美子氏および坂井誠氏を担当者とし、春・秋学期共に月曜日（11：00−15：00）、水曜日（11：00−12：55）、木曜日（13：00−15：30）に実施した。各学生が設定した目標に沿って教材や学習方法を提案し、ポートフォリオ（学習記録）を活用して、自律的に学習計画や目標が立てられるよう助言を行った。春学期の説明会には多くの学生が集まり、受け入れ可能な人数を大幅に超える申し込みがあったが、個別指導という性質から、希望する学生全員にプログラムを提供することは叶わなかった。そのため、参加申込書に記入された英語学習の目標を勘案して選抜を行った。本年度の参加者数は以下の通りである。

表1　ILSSPの実績

	LE	LF	LA	EE	EB	EG	SG	SW	JU	JC	JP	JG	KS	KC	PS	PE	計
春	3	2	2	1	0	3	0	0	0	1	4	0	7	0	1	0	24
秋	1	0	3	2	0	0	0	2	0	1	2	1	7	1	2	0	22

English Clinicは、ILSSPに参加することができなかった学生や英語学習に関するさまざまな質問や悩みを抱える学生に向けて本年度からスタートした自律学習支援プログラムである。本学非常勤講師Ida Gomez氏および田辺玲子氏を担当者とし、春・秋学期共に火曜日（12：35−13：15）

と金曜日（12:35−13:15）に実施した。各学生が抱える相談内容に応じて、文法や語彙について、TOEIC・TOEFLについて、プレゼンテーションについて、留学関係書類の作成について、英語の学習方法等について助言を行った。また、学生が友人を連れて英会話の練習ができる機会も提供している。本年度（12月末時点）のセッションの予約率は以下の通りである。

表2　English Clinicの実績

	春学期	秋学期	全体
提供数	52	50	102
予約数	41	32	73
予約率	78.8	64.0	71.6

予約率は全体で71.6%と概ね良好である。来年度以降も多くの学生に利用してもらえることを期待したい。

2.2　ドイツ語部門：吉田真（経済学部）

2019年度ランゲージラウンジ(ドイツ語部門)は「ドイツ語 de ランチ」と題して、片山由有子氏（本学非常勤講師）が毎週月曜日の昼休み（12：30〜13：20）に行なった。毎回定期的に参加する学生の人数は年間を通して6〜8名程度であった。参加者の大半はドイツ語初級を履修している１年生の学生だったが、中級ドイツ語を履修している２年生の学生やドイツ語未修者も参加し、ドイツ語だけでなく、ドイツ語圏の文化に関するさまざまな情報を提供する場となった。

参加者の大半が初学者とドイツ語未修者だったため、旅行や日常生活、ネットショッピングですぐに活用できるドイツ語を身につけることを主眼とした。教材として用いたのは、過去のNHKドイツ語講座やドイツ語圏に関するドキュメンタリー放送、ドイツの様々なメーカーや商品のHP（ダルマイヤー、LAMY、WELEDA、ドクター・ハウシュカ、BMW、ドイツ鉄道等）やYouTubeなどである。現代ドイツの社会情勢など文化・政治にまつわることも同時に扱った。特に秋学期は、次回扱うテーマを参加者と話し合い、前日までに重要単語や言い回しをメールにて知らせることで、内容の充実と学習の効率化を図った。

本講座では春秋両学期を通じ、参加者がドイツ語やドイツ文化に親しみをもってもらえるよう努めること、参加者のドイツ語学習へのモチベーションを高めることを目標とした。

2.3　スペイン語部門：大森洋子

スペイン語では、昨年に引き続きオンラインコースを行なうとともに、Francisco GARZÓN先生を講師に、Tertuliaと名付けて、会話実践の時間も設定した。

自律的な学習をより効果的に行えるオンラインコース、セルバンテス文化センターが開設しているAVEがリニューアルし、AVE globalとなり、スカイプ授業を含む自律学習コースとなった。今年は、学生のレベル、ニーズに合わせ、スカイプ授業の時間、回数を調整し、コース最初、および途中で２回から４回の受講を行なうことが可能になり学生たちの学習意欲の向上がみられた。昨年度より大学での学習内容に合致したものを工夫、さらに、どのような会話がなされるかについて事前に配布物を用意し、スムーズに学習ができるようにした。また、学習者のニーズ、レベルによってコースをカスタマイズし、そのコース学習を行なっている学生が何名かいる。受講生の中にはより興味を持ち、スペインの留学希望などにも繋がってきている。

一方、会話スペースでは、一部の授業とコラボする形で、スペイン語圏の生活、都市について聞いてくるなどの課題を出すことによって、授業外での学習を促した。後期は、より具体的に留学、DELE受験、SIELE受験（スペイン語力を能力別に点数で知らせるコンピュータによる試験）受験など具体的な目標を持った学生の来室がある。年間平均的に５、６人の参加があった。今後は、授業との連携、スペイン語圏への興味をかき立てるような工夫を担当者と話し合い、すすめていくことを来年度の課題とし、学生たちに外国語でコミュニケーションすることの楽しさ、新しい気づきなどを提供したい。

2.4　中国語部門：張宏波

2019年度中国語部門「中文会話倶楽部」の活動は、昨年までに引き続いて中国人留学生がスタッフとなって担当し、毎週木曜日の昼休みに横浜校舎138教室で行なわれた。春学期と秋学期にそれぞれ12回と13回開催された。

春学期は参加者数が全体に多く、数名の回もあったが、20名、30名を越えるほどの盛況回も見られた。人数が多いとやはりそれ自体で明るく活発な雰囲気が生まれ、楽しみながら学ぶという目的に適う場になりやすいことが確認された。

秋学期は一転して少なく、毎回数名程度の参加者だった。前後の授業配置の影響が小さくないようである。

また、12月には参加者からの要望が毎年上がってくる「国際交流会」を開き、学生自身が水餃子を手作りして中国の食文化を体験する機会を設けることができた。これには、日本人学生のほか、中国、韓国、ミャンマーからの留学生、さらに中国系アメリカ人の留学生2名も参加して、16名で賑やかに交流を深めることができた。近年の日本の学生は、家庭で餃子を手作りするという経験をほとんど持たないようで、新鮮な経験だったようである。

普段の会話倶楽部は留学生との交流の場でもあり、それ自体を楽しめる側面もあるが、やはり広い意味で「語学」の場という雰囲気が強い。一方、体験や実践の場を通して中国語学習意欲が刺激される学生がいるのも確かである。今後も様々な学びへの通路を用意するよう心掛けていきたいと

考えている。

2.5　韓国語部門：金珍娥

2019年度　韓国語ランゲージラウンジは横浜校舎において以下のような日程と体制で週１回実施した：

●横浜校舎 担当講師：高槿旭（コグヌク）
実施期間：春学期2019年４月23日～７月16日（毎週火曜日）
　　秋学期2019年10月１日～12月17日（毎週火曜日）
教　　室：明治学院大学横浜校舎　138教室
時　　間：12時30分～ 13時20分
人　　数：春学期　6～10人　秋学期　2～3人

担当講師の高槿旭先生から以下のようなことが伝えられた：
話す能力の向上を最大の目標とした。具体的な内容と、成果は次のごとくであった。

1. 学習内容：以下の3点を中心に韓国語の会話能力向上に努めた。

・就職，趣味といった身近なテーマを中心に韓国語で語り合う。
・日本語圏と韓国語圏の文化の相違点について韓国語で語り合う。
・最近のニュースや好きなドラマなどの内容をまとめて韓国語で語り合う。

2. 学生の反応と成果

韓国への留学を希望している参加者が多く、積極的に参加しており、学習意欲は非常に高かったと言える。春学期は韓国人の留学生も参加してもらい、学生には良い刺激を与えることができた。

学生からは、「生身の韓国語に触れる機会が得られて嬉しい」、「少人数で話しやすい」、「韓国に興味を持っている仲間と交流できて良かった」などという意見が多い。また、韓国文化についても、「理解を深めることができた」、「講師が韓国語で講座を進めてくれるのが嬉しい」といった意見も得られた。

総括して、韓国語のランゲージラウンジが韓国語能力の向上のみならず韓国文化についての関心と知識の向上、学習モチベーションの向上へと、導くことができたと考えられる。

2.6　フランス語部門：塩谷祐人

2019年度ランゲージラウンジ（フランス語部門）は、勝山絵深氏（本学非常勤講師）が毎週月

曜日の昼休みに行った。ラウンジの名称をPause Café（ポーズ・カフェ）としたのは、学科を越えてフランス語を学ぶ学生たちが集まり、フランス語の疑問を解決したり、実践的なフランス語を習い覚えたりするだけでなく、フランスの情報が得られるカフェのような場所になることを願ってのことである。

春学期は回によって人数の増減はあるものの、10人前後の学生が参加し、カフェやマルシェあるいは映画といったフランスの文化に触れつつ、日常会話を学んでいた。同時に、学生からの要望もあり、授業に関する個別のサポートも行った。

秋学期は授業で毎日フランス語に触れているためか、フランス文学科の学生の参加が少なくなり、フランス文学科以外の学生が中心となった。参加者は概ね毎回2〜3名であった。そのため、学生からの要望に合わせて、フランス語検定（４級）の対策や授業のテスト対策を含めたサポートが活動の中心となった。

文法を中心に勉強したいという参加者や会話の練習を行いたいという参加者がおり、学生の希望や反応はまちまちであった。そのため、今後は各学生の要望に応えつつ、ラウンジ内全体での会話練習などが両立できるような運営ができるようにしたいと考えている。また昼休みで昼食を取りながら行っていることもあり、会話の練習には工夫が必要であると思われる。

04

研究プロジェクト

04

プロジェクト報告

到達目標を明示した スペイン語教育の実践に向けて

プロジェクトメンバー：大森洋子*、三角明子 他（*：代表者）

引き続き、以下の作業を続けている。本年度最終年度である。

明学ポートフォリオに挙げた指標を見直し、より具体的にスペイン語の必修科目の中で補助的に使えるように整備を進めている。

・教育スタイルと学習スタイルがマッチしているかを検証する。学生の学習スタイルにある特徴があるのかないかを検証する。それに基づいて、教材、授業方法などとの整合性を検証する。実際にSIELE（技能別に点数で能力を測るスペイン語のテスト）の受験に学生の協力を得て進め、授業での成果、Language lounge, AVEコースの利用、DELE準備講座の成果、短期留学、長期留学の効果のデータを収集し、スペイン語の到達度の設定の見直しの参考資料とする。

実際のコミュニケーションの能力向上のための授業での工夫を模索中である。

・ティーチングポートフォリオの利用の可能性を検討し、授業での工夫、教員の方の授業の実践の改善についての提案を模索していく。

授業活動、到達度等については、なるべく早い時期に（次号）カルチュール等で発表する予定である。

プロジェクト報告

身体運動が運動機能および認知機能に及ぼす影響

プロジェクトメンバー：黒川貞生*、杉崎範英、諏訪間恵美、坂本慶子、榎本翔太、小野寺正道（パワーラボ）（*：代表者）

【目的】

超高齢化社会を迎えるわが国において、健康寿命の延伸や介護予防は大変重要な社会的課題である。健康寿命や介護予防を阻害する3大因子として、ロコモティブシンドローム（ロコモ）、メタボリックシンドローム（メタボ）、および認知症が挙げられている。近年の研究においては、これらの因子に対して身体活動が効果的であることが報告されている。健康日本21など様々な取り組みによって、身体活動の重要性・有効性についての認識は浸透しつつあり、特に中高年者を中心に日常的に運動を実施している人は増加している。しかしながら、実施されている運動は多岐にわたっており、健康寿命の延伸や介護予防の観点から、どのような運動がロコモ、メタボ、あるいは認知症に対して効果的であるかは十分に検討されていない。例えば、記憶に関係する脳の海馬の大きさは、加齢とともに緩やかに縮小し、認知症になると海馬が顕著に萎縮するが、ウォーキングなどの有酸素運動が認知機能や海馬の大きさを改善することが報告されている（Kramer et al. 1999、Erickson et al. 2009など）。近年の研究では、レジスタンストレーニングも認知機能を改善させることが示されている。また、最近の研究においては、エアロバイクなどのフィットネス（有酸素）運動よりも、ダンスを行った方がより海馬を増大させるとの報告がなされている（Rehfeld et al. 2017 Frontiers in Human Neuroscience）。同研究においては、バランス能力についても、ダンスがフィットネス運動よりも効果的であることが示唆されている。ところで、運動器の形態や機能に対するトレーニングの効果は、有酸素運動と筋力トレーニングなどの無酸素運動では異なることも古くから知られている。このようなことからすると、実施する身体活動の種類（あるいは頻度などの条件）によって、健康寿命の延伸や介護予防に対する効果に差があることが考えられ、この点を明らかにすることは、超高齢化社会における有効かつ効果的な運動指針の作成に対して重要な情報を提供することになる。

最近のイギリスとフランスの研究チームによる縦断的コホート研究は、追跡開始時点では身体活動に差は認められなかったが、年齢を追ったときの身体活動を調べると、認知症がなかった人に比べて認知症と診断された人では診断の9年ほど前から身体活動が低下していた、と報告している。そして、身体活動が多い人で認知症のリスクが低いことを示した過去の研究結果は逆因果関係によって説明できるかも知れないと報告している（Sabia et al, 2017 British Medical Journal）。

そこで本研究においては、上述の報告も踏まえつつ、中・高齢者を対象として、身体運動経験の有無および身体運動の種類が、身体機能および認知機能にどのように関係しているかを明らかにすることを目的とした。

【方法】

本研究の対象は、東京および神奈川に在住する介護保険の適用を受けない自立した生活を送る高齢者（65～85歳）とし、以下のアンケート調査および測定を行った。

〈アンケート調査〉

教育歴、身体運動実施状況（スポーツ活動歴、運動種目、活動形態（個人/グループ）、運動時間・頻度等）

〈測　定〉

身　体　特　性：身長、体重、体組成（体脂肪率、筋量）、血圧

運動能力テスト：ロコモ度テスト（2ステップ、立ち上がり）、歩行測定、膝関節伸展トルク

認知機能テスト：国立研究開発法人国立長寿医療研究センターが開発した認知機能評価システムNCGG-FAT（National Center for Geriatrics and Gerontology-Functional Assessment Tool）

統　計　処　理：認知機能と運動機能との関連性を説明するために、NCGG-FATを用いて得た検査結果を目的変数とし、年齢、教育歴、収縮期血圧を調整しても有意な関連性を示す運動機能項目を説明変数として、重回帰分析を行う。

【結果および考察】

本研究は被験者数を増やしながら継続中であり、データ処理についても完全に終わっていない。したがって、ここでは分析途中までの結果について提示し、若干の考察を加える。

表1は認知機能と体力要素（握力および歩行速度）の相関マトリクスを示したものである。全般的な認知機能と握力および歩行速度の間には各々1%水準で有意な相関関係が認められた。

昨年度、我々はスポーツ活動年数と歩行運動において重要な役割を果たす膝関節伸展トルクとの間に有意な正の相関関係を報告した（黒川貞生 他、2018 Synthesis）。先行研究および本研究結果から勘案すると、スポーツを実施した年数に依存して、体力（下肢伸展力、歩行能力、握力）が向上し、ひいては全般的な認知機能も高まると解釈することができる。しかし、今回、全般的な認知機能を目的変数、歩行速度を独立変数として回帰分析した結果では、決定係数R^2は0.15とかなり小さく、他の要因も大きく影響していると考えられる。一方で、全般的な認知機能が低下したために、例えば自宅に留まる時間が多くなり、そのために歩行をする時間も短くなり、結果的に歩行速度が低下したとも考えられる。つまり、「鶏が先か卵が先か」という疑問も残る。この疑問を解くためには、認知機能向上に有効と考えられる運動・スポーツを行わせ、縦断的な研究を実施することが実験デザインとして考えられる。

表1　認知機能と握力および歩行速度との相関関係

	握力	歩行速度
記憶力	0.165	0.246
注意力	0.268	0.162
実行力	−0.175	−0.253
処理能力	0.378**	0.112
フレイル（全般的認知機能）	0.398**	0.392**

** P<0.01（n=41）

本研究の目的は身体運動、その運動様式等が認知機能に及ぼす影響を検討することであるが、そのために必要な十分なデータ収集が完了しておらず、重回帰分析を含めたデータ分析にまで至っていない。ジョギング、水泳、ダンス、ストレングス・トレーニング、グランドゴルフ等の身体運動・スポーツを行っている高齢者の方々を被検者として、各々100名程度を目標に今後もデータ収集を継続して行い、どのような運動・スポーツが認知機能低下抑制に適切であるかを明らかにしたい。そのうえで、次のステップとして、適切な運動・スポーツを介在させた縦断的研究へと発展させたいと考えている。

【参考文献】

Kramer AF. et al., Ageing, fitness and neurocognitive function. Nature 1999 (400):418-419.

黒川貞生 他, 身体運動が運動機能および認知機能に及ぼす影響. Synthesis 2018.

Erickson KI. et al., Exercise training increases size of hippocampus and improves memory. PNAS 2011 108(7)3017-3022.

Rehfeld et al., Dancing or Fitness Sport? The Effect of two training programs on hippocampal plasticity and balance ability in healthy seniors. Frontiers in Human Neuroscience 2017(1) 305 doi: 10. 3389 / fnhum. 2017. 00305

Sabia S et al., Physical activity, cognitive decline, and risk of dementia:28year follow-up of Whitehall II cohort study. British Medical Journal 2017(357) doi: 10. 1136 / bmj. j2709.

プロジェクト報告

首都圏開発と市民活動の現代史的探究

プロジェクトメンバー：猪瀬浩平*、植木献、長谷部美佳、荻村哲朗、可部州彦（＊：代表者）

本プロジェクトは、戦後の日本において市民活動・運動が如何に展開されてきたのか、首都圏近郊を主たる対象に探究するものである。特に、障害者や難民、外国人や外国にルーツのある人などマイノリティと共に生きることを目指して行われてきた活動や、食や農に関わる活動などに焦点をあて、首都圏の開発との関係に留意しながら、市民活動・運動が如何に実践されてきたのか、言説と日常実践の双方の調査・分析を通じて明らかにすることを目指す。

本年度は6月に、埼玉県における外国人の就労（農業分野）について調査を行い社会理論動態研究所研究員の中田英樹氏から、最新の研究知見について情報提供いただいた。7月には、ボランティア市民活動実習の受け入れ先でもある、社会福祉法人青丘社の三浦知人氏への聞き取り調査を実施した。川崎桜本において文化共生の取り組みを先駆的に行ってきた青丘社において、保育園での障害児の受け入れを一つのきっかけとして、在日コリアンだけでなく、より多様なマイノリティに対する取り組みが意識されるようになった。三浦氏からは、桜本の近隣で展開された青い芝の会の運動との交流についてもうかがうことができた。

8月には、同じくボランティア実習の受け入れ先でもある、NPO法人こえとことばとこころの部屋の上田假奈代氏によるワークショップを実施した。見沼田んぼ福祉農園にかかわる人の中には、かつて釜ヶ崎をはじめとするドヤ街を拠点に労働した経験を持つ人がいる。詩という方法を使いながら、その経験の聞き取りと表現を行うことで、これまで関係がないと考えられていた、さいたま／見沼田んぼと釜ヶ崎などのドヤ街を、人びとが生きた経験として結び付けるための方法を探った。

12月には、埼玉の障害者運動の一つの拠点である越谷市において、農村と障害者運動の交流の様態を探るため、成城大学民俗学研究所研究員の加藤秀雄氏を招いて、当該地域の民俗調査を如何に行うのか議論した。加藤氏の協力を受けながら、年度末にかけて当該地域の調査を実施する予定である。民俗学と障害者運動を結びつける視座はこれまで希薄であり、この調査を通じて首都圏開発を捉える新たな視座の獲得を目指す。

また、研究プロジェクトの一環として、2020年2月18日には障害のある家族を描いたドキュメンタリー映画『ちづる』の上映会と、監督や当事者を交えたトークイベントを下記の要領で実施した。これに加えて年度内をめどに、本研究プロジェクトの成果として首都圏開発をめぐる論文を執筆する予定である。

●ドキュメンタリー映画『ちづる』上映会＆トークイベント
【日　時】 2020年2月8日（土）14時～17時30分
【場　所】 明福寺（東京都港区三田四丁目4番14号）
【トークイベント登壇者】
赤﨑正和氏（映画『ちづる』監督）
猪瀬浩平氏（明治学院大学 教授）

臼井隆志氏（株式会社ミミクリデザインディレクター）
本学「ボランティア市民活動研究」履修学生

【主　催】 特定非営利活動法人 Collable

【共　催】 明治学院大学 教養教育センター付属研究所 研究プロジェクト『首都圏開発の現代史的探究』

05

公開講演会

05

公開講演会

付属研究所主催 映画『教誨師』上映会 +トークセッション 報告

研究所所長　渡辺祐子

【開催概要】

日時：2019年5月21日（火）

・上映会　16:45〜

・トークセッション　18:40〜

■司会：キリスト新聞社　松谷信司 氏

■登壇ゲスト：佐向　大 監督、北川　善也 学院牧師

■登壇学生：国際学科4年 村松有紗、社会学科2年 松島基紀

会場：白金校舎 2号館 2102教室

主催：キリスト新聞社

協力：教養教育センター付属研究所

「明学で『教誨師』の上映会を監督トークセッションとあわせて開催しませんか？」キリスト新聞社社長の松谷信司氏からこんなお誘いをいただいたのは新年度が始まるか始まらないかという頃だったと思う。この映画が劇場上映された際に鑑賞の機会を逃していたわたしは、一も二もなく付属研協力で上映会を実施したいと思った。しかもDVD発売記念のキャンペーンで費用はすべて先方が提供してくださるというのだから、引き受けない理由はない。

日程の確定に少し手間取ったものの、計画はとんとん拍子に進んだ。学院牧師の北川善也先生にセッションへの登壇をご快諾いただいたほか、ぜひ学生の感想を聞きたいという松谷社長の提案で、二名の学生にも来てもらうことになった。

佐向監督とのトークセッションでは、主役を演じた故大杉漣が資金難に悩む監督を励ましながら、プロデューサーとして何としても映画を成功させようとしたこと、監督が実際に教誨師を経験した牧師への取材を重ね教誨師像をリアルに作り上げる努力をしたことなど、映画作りにまつわる様々な苦労話を伺うことができた。また事前に映画をご覧になって十分な準備をなさっていた北川牧師がひとつひとつの演出が持つ意味を監督に問いかけてくださったおかげで、来場者には一度見ただけでは到底得ることができない細部に至るまでの気づきが与えられた。まさにトークセッションのだいご味である。

時間の制限のため、学生の発言時間が限られてしまったのは若干心残りだったが、それでも二人の学生からも率直で誠実な感想を聞くことができた。

この上映会は、徐正敏先生の授業「宗教史7」の公開授業として開催されたもので、この授業の履修者を含めて、学内外から120名の参加者があった(トークセッションまで残ってくださったのは65名)。上映会を授業の一環としてくださった徐先生、ポスター制作から宣伝、当日の采配に至るまで様々に配慮してくださった広瀬さんはじめ教学補佐の皆さんに厚く御礼申し上げる。

死刑囚との対話が始まる。
映画『教誨師』DVD発売記念上映会＆トークセッション
教誨師×明治学院大
牧師、信徒、教会関係者も歓迎！
＊入場無料／申込不要
5月21日（火）
16:45～ 上映会
18:40～ トークセッション
@明治学院大学 白金校舎 2号館 2102教室
登壇ゲスト 佐向 大 監督
北川善也 明治学院学院牧師
協力：明治学院大学教養教育センター付属研究所、キリスト新聞社

06

研究業績

06

上野 寛子

【論文】

"A Genetic Study of a Newly Found Population of Siberian Salamander, *Salamandrella keyserlingii* (Amphibia, Caudata)" Current Herpetology 38(2): 122–127, August 2019

塩谷 祐人

【論文】

「フランスの『食』はフランスの縮図」『中央評論』71巻2号（通巻第308号）　2019年7月

「なぜアゴタ・クリストフの三部作は単純にして複雑なのか」『明治学院大学教養教育センター紀要カルチュール』14(1) 2020年3月掲載予定

【学会発表】

「アゴタ・クリストフの小説技巧」スイス文学会　明治大学駿河台キャンパス（2019年6月22日）

黒川 貞生

【論文】

教養教育センター紀要『カルチュール』第14巻　第1号　2020年3月25日　発行予定
タイトル：大学1年生における体力と生活習慣の関係
執筆者：杉崎範英、榎本翔太、諏訪間恵美、森田恭光、黒川貞生、亀ヶ谷純一、坂本慶子

徐正敏

【著書】

『近代東亜国除視國下的基督教教育与文化認同』（中国語、共著）、復旦大学出版、2019、141-150頁（全体179頁）

『協力と抵抗の内面史』（共著）、新教出版社、2019、122-153（論文）、250-271（討論）頁（全体274頁）

『未完の独立運動』（共著）、新教出版社、2019、153-163頁（全体275頁）

【論文】

「日本プロテスタントの神学教育の歴史と現在―韓国との比較の観点から―」、明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュール』、2019.3、29-43頁

「戦後日韓キリスト教の関係と歴史的責任の問題」（韓国語）『基督教思想』、2019.6、9-17頁

【学会発表】

「日韓キリスト教における2.8独立宣言と3.1独立運動」、2.8独立宣言100周年記念国際シンポジウム、在日本韓国YMCA、東京、2019.2.9

「3.1独立運動とキリスト教」、日韓聖公会青年セミナー、日本聖公会青年委員会、東京、2019.2.11

『日本キリスト教史の理解と「キリスト教コンプレクス」』、東京神学大学東北アジア教会史研究会セミナー、東京神学大学東北アジア教会史研究会、東京、2019.3.29

「3.1独立運動、大韓民国臨時政府樹立の贖罪史的な意義」、3.1独立運動、大韓民国臨時政府樹立100年記念済州国際カンファレンス、3.1独立運動、大韓民国臨時政府樹立100年記念済州国際カンファレンス準備委員会、斎州韓国、2019.4.11

「アンダウドの宣教遺産とセムンアン教会」、第56回アンダウド学術講座予備発表、大韓イエス教長老会セムンアン教会アンダウド学術講座委員会、ソウル韓国、2019.8.17

「アンダウトの宣教精神とセムンアン教会、3.1独立運動とキリスト者のアイデンティティ」、第56回アンダウト学術講座本シンポジウム、大韓イエス教長老会セムンアン教会アンダウト学術講座準備委員会、ソウル韓国、2019.9.8

「反帝国主義のための宗教間の協力ー韓国の3・1独立運動を中心にー」、上海大学国際学術会議、上海大学文学院歴史系中国史高原学科、上海大学宗教与中国社会研究中心、上海中国、2019.11.2

徳間 晴美

【論文】

「日本語学習者の主体的選択に委ねられる敬語学習への向き合い方」『待遇コミュニケーション研究』第17巻 pp.52-67（2020）

【学会発表】

「敬語学習の大切さと大変さの狭間にいる学習者―『完璧』を求めない学習者の事例分析―」日本語教育方法研究会　第53回研究会　福島大学（2019.9.14）

【その他（話題提供者）】

「日本語学習者の敬語学習への向き合い方を方向づけるものは何か」待遇コミュニケーション学会第４回研究発表会　早稲田大学（2019.12.14）

中野 綾子

【学会発表】

「「兵隊という読者」の宣伝―雑誌「兵隊」の記事を中心に」東アジアと同時代日本語文学フォーラム（台北・東呉大学）2019年10月26日

【その他】

「軍隊内での読書・教育・研究が浮かび上がる史料」金沢文圃閣編集部編『日本陸軍『各部隊文庫図書目録』―帝国軍隊の読書装置』2019年11月（推薦文）

野副 朋子

【論文】

Aung, M.S., Masuda, H., Nozoye, T., Kobayashi, T., Jeon, J-S., An, G. and Nishizawa, N.K., "Nicotianamine synthesis by OsNAS3 is important for mitigating iron excess stress in rice" *Front Plant Sci,* 10; 660: 1-16. doi: 10.3389/fpls.2019.00660, 2019

Nozoye, T., von Wirén, N., Sato, Y., Higashiyama, T., Nakanishi, H. and Nishizawa, N.K., "Characterization of the nicotianamine exporter ENA1 in rice" *Front Plant Sci.,* 10; 506: 1-17. doi: 10.3389/fpls.2019.00502, 2019.

【学会発表】

イネのニコチアナミン排出型トランスポーター ENA1の植物における機能の解析、日本土壌肥料学会（2019，静岡）

ムギ類の鉄栄養に関わるムギネ酸類研究に関する最近の動向、第14回ムギ類研究会（2019，鳥取）

福山 勝也

【論文】

「マンガン化合物水溶液を試料としたホウ砂球反応における呈色とその傾向」
『カルチュール』（明治学院大学教養教育センター紀要）　2020年3月掲載予定

【学会発表】

「溶球分析法における金属イオン併存時の呈色変化」第55回熱測定討論会　東大阪（2019年10月）

Elam, Jesse

【Papers】

Nadasdy, P., & Elam, J. (2019). Critical discourse analysis of an authentic text applying Fairclough's three-dimensional framework. *東京電機大学総合文化研究*, 第17号, 21-30.

Elam, J. (Ed.). (2019). The effects of interpersonal strategies, worldviews, and conflict strategies on intercultural communication. *The Proceedings of 2019 International Conference and Workshop on TEFL & Applied Linguistics:* The Department of Applied English, Ming Chuan University (pp. 27-38). Taipei, Taiwan: Tung Hua Book Co., Ltd.

【Presentations】

Elam, J. (2019, August). *Using Quizlet Live to build communication and collaboration.* 2019 SPARCC Technology Conference, North Canton, OH.

Elam, J. (2019, November). *Fostering intercultural competence in the classroom.* Daegu-Gyeongbuk KOTESOL Regional Conference: The Inner Thrive, Deagu, South Korea.

Thomas, Dax

【学会発表】

Textbook vocabulary coverage in Japanese university student mythology essays.
Asian Conference on Education (Tokyo, Japan). November 1, 2019

◆上記のほか、所員の業績を、下記URLにて報告しております。
https://gyoseki.meijigakuin.ac.jp/mguhp/KgApp?courc=270000

2020年3月31日　発行

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報
SYNTHESIS 2019

編集代表　渡辺　祐子
発 行 者　渡辺　祐子
挿　　画　土方　淳代
発　　行　明治学院大学 教養教育センター付属研究所
〒244-8539　横浜市戸塚区上倉田町1518
電話 045-863-2067
印　　刷　相和印刷株式会社

Printed in Japan

SYNTHESIS 2019

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報

SYNTHESIS 2019

シンセシス

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報 2019